

二〇一八年七月二七日

漂着の流木あまた秋思憑く
ただ耐ゆるほかに術なきこの猛暑
翠黛の迫りて瀬戸の風涼し
抱へ来る籠に山盛り茗荷の子

せいじ
三 刀
せいじ
よし女

二〇一八年七月二六日

乗馬クラブへと標たつ夏木立
撒き餌に大口開けし鯉涼し
献句吊るみたままつりの樹下涼し

菜々々
ぼんこ
なつき

二〇一八年七月二五日

三味洩るる祇園花街軒すだれ
青田中進むがごとし湖西線
超高層ビル抽んでし雲の峰
神の森一枚岩の滴れり
火の匂ひ水の匂ひの鵜飼かな

菜々々
隆 松
更 紗
さつき
宏 虎

二〇一八年七月二四日

砂利道の音の乾きの暑さかな
貨物船進むともなき沖がすみ

はく子
こすもす

二〇一八年七月二三日

祈願絵馬ことりともせぬ大暑かな
蛇口でる水湯のごとき大暑かな
大鳥居潜りし一步風涼し
朝拝に整列したる巫女涼し

さつき
満 天
菜々々
さつき

二〇一八年七月二三日

裏山の杉美林いま蟬浄土
雲くぐり出て上弦の月涼し
夏草に掉さして出づ渡し舟
激辛のカレーを食べて暑氣払
息切らし仰ぐ溪谷百合涼し

三 刀
菜々々
なつき
たか子
智恵子

二〇一八年七月二二日

干物の暑さもろとも畳みけり
堀越しに煙の匂ふ庭花火
黒揚羽帝の歌碑のそびらより

満 天
智恵子
菜々々

毎日句会みのる選・二〇一八年七月二九日